

信頼の測定

——対人信頼感に焦点を合わせて——

青山学院大学 真鍋一史

1 目的

近年、多くの国ぐにで、実施されるようになってきた「大規模な国際比較調査」においては、「対人信頼感 (interpersonal trust)」の測定のためのさまざまな質問項目が用いられている。「国際社会調査プログラム (ISSP)」や、「ヨーロッパ価値観調査 (EVS)」もその例外ではない。本報告では、ISSP(1998)の質問項目と、EVS(1999)の質問項目の、いずれが「対人信頼感」の測定の指標 (indicator) として、よりすぐれたものといえるかについて、実証的に検討することをめざす。

2 方法

以上の実証的な検討のために、ここではつぎの2つの方法をとる。

- (1) ISSP(1998)と EVS(1999)の「対人信頼感」の頻度分布の比較分析
- (2) 「対人信頼感」の「構成妥当性 (construct validity)」の比較分析

さらに、(2)の比較分析のために、つぎの2つの方法をとる。

- ①「対人信頼感の社会的(societal)なレベル」と「経済発展(economic development)のレベル」との関係の分析：1999年の国民一人当たりの国民総生産を横軸に置き、「ほとんどの人は信頼できる」とする回答の%を縦軸に置いた座標軸上に、それぞれの国を位置づけた。
- ②「対人信頼感」と「議会への信頼感 (confidence in parliament)」との関係の分析：両者の関係を「相関係数」で示した。

3 結果

- (1)の方法による分析の結果：ISSP(1998)の質問項目の方で、「対人信頼感」に対して肯定的に回答する国の数が増加する。
- (2)の①の方法による分析の結果：「対人信頼感の集合的レベル」と「経済発展のレベル」との間には「正」の関係が見られる。
- (2)の②の方法による分析の結果：「対人信頼感」と「議会に対する信頼感」との相関関係は、EVS(1999)にくらべて、ISSP(1998)の方でより大きい。

4 結論

以上から、「対人信頼感」を測定する指標としては、EVS(1999)の質問項目にくらべて、ISSP(1998)の質問項目の方で「構成妥当性」がより高いといえることができる。つまり、前者にくらべて、後者の方がよりすぐれているといえるのである。

文献

Wrightsmann, Lawrence S. (1991). Interpersonal Trust and Attitudes towards Human Nature, in Robinson, John P. et al. eds., *Measures of Personality and Social Psychological Attitudes*, San Diego: Academic Press.